広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	フィラー「まあ」の意味を考える
Author(s)	柳澤，浩哉；馮，文彦
Citation	広島大学日本語教育研究 , 31 : 10 - 16
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50905
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050905
Right	Copyright (c) 2021 広島大学大学院人間社会科学研究科日本語教育学プログラム
Relation	

フィラー「まあ」の意味を考える

柳澤浩哉・馮文彦

A Hypothesis about Usage of “Maa”

YANAGISAWA Hiroya, Wenyan FENG

１．「まあ」に対する仮説

わだかまりと曖昧性の二つの仮説は、「まあ」についての代表的な仮説と言えるのではないだろうか。実は、この二つの仮説には共通の原則を見出すことができる。わだかまりの確認から初めてみたい。次は大工原(2010)の例文である。

(1) 日本でリンゴと言ったら、**まあ**青森ですよ。
（大工原 2010：128）

大工原は、この文では、「まあ」が「細かいことを言えば岩手や長野もあるけど」という内心のわだかまりをほのめかすと述べている。この仮説を、わだかまり仮説と呼んでみたい。わだかまり仮説を次の例文に適用してみる。

(2) **まあ**、いいと思います。
（作例）

この文では「まあ」が付くことによって、わだかまりを感じながら「いいと思います」と判断した、すなわち「いいと思います」と無条件では言えないという含みを感じさせる。ここでのわだかまりには、「細かい点に問題があるが」といったものが想定できるだろう。あるいは、次の文の独特の印象もわだかまりで説明可能である。

(3) **まあ**、私にはよく分かりません。
（作例）

文頭の「まあ」を短い「ま」とすると「まあ」の印象が弱まるが、「まあ」をしっかり発音すると、何かを隠しているような印象を与える可能性がある。「まあ」の作るわだかまりが、「全く知らない訳ではないが」といったものを感じさせるため、そのような印象が生まれると説明できるだろう。

わだかまり仮説を一般化するため、本稿では命題に対する制限条件という言葉を使ってみたい。(1) の「日本でリンゴと言ったら、まあ青森ですよ。」に含意されるわだかまりは、「岩手や長野などにこだわらないことで」あるいは「細かい問題を無視することで」という条件を認めることで、「日本でリンゴと言ったら、青森ですよ」に命題が成立することを伝えると言い換えることができる。あるいは（2）の「まあ、いいと思います。」のわだかまりも、「いいと思います」という命題が、「細かい問題点にこだわらなければ」といった制限条件の下で成立することを含意すると言うことができる。本稿では、わだかまり仮説を次のように一般化してみたい。

(4) 「まあ」は命題が無条件では成立せず、何らかの制限条件下で成立することを伝える。

このように言い換えることでわだかまり仮説の一般性が高まり、「まあ」の多くの用法に適用できるようになる。その一つが曖昧性の仮説である。曖昧性を提唱した冨樫（2002）の例文を引用してみよう。

(5) 1980 円に消費税だから、**まあ**、2100 円くらいかな。
（冨樫 2002：16）

(5)の「2100 円」を「2079 円」のような正確な数字に置き換えると「まあ」が立てなくなることなどを根拠に、冨樫は「まあ」の機能を「処理過程の曖昧性を表示する」と述べている。曖昧性は母語話者が「まあ」に直感的に感じる印象なので、受け入れやすい仮説と言え

るだろう。曖昧性とは、誤差の許容を条件に命題が成立するということだから、（4）の仮説で説明可能になる。（5）の例文で言えば、誤差の許容を条件に「2100円くらいかな」という命題が成立することを示すと説明できる。さらに、ヘッジの「まあ」といわれる用例も同様である。

(6) **まあ**、大丈夫だよ。

（作例）

これを「まあ」を付けない次と比較してみる。

(7) 大丈夫だよ。

（作例）

両者を比較すると、「大丈夫だよ」という判断に対する確信度を「まあ」が下げていることが分かる。これは、予想が外れる場合に備えたリスク・ヘッジと言えるので、このような「まあ」をヘッジの「まあ」と呼ぶことがある。（6）における「まあ」は、「大丈夫だよ」という命題が無条件で成立しないことを伝えている。ヘッジの「まあ」は（4）の仮説をそのまま形にした用法と言えるかもしれいない。

別の用例をあげてみる。次の例文は、予算超過の領収書を見せられた経理担当者が、超過分を大目に見てやろう判断して発した言葉と思っていただきたい。

(8) **まあ**、これくらいなら、いいでしょう。

（作例）

同じ状況で「まあ」を付けなかった場合、どのように意味が変わるだろうか。

(9) これくらいなら、いいでしょう。

（作例）

二つの例文の間には、経理担当者の気持ちの違い、さらにオーバーした金額の違いが感じられると思う。(8)は経理担当者が大目に見ていることを感じさせるが、（9）にそのような印象はない。当然、オーバーした金額が大きいのも（8）の方である。「これくらいなら、いいでしょう」という命題が無条件に成立するか否かが、両者の印象の違いを生んでいる。

あいづちの「まあ」も（4）の仮説から説明できる。

(10) そうだね。

(11) **まあ**、そうだね。

（作例）

「まあ」のない（10）が迷いなく「そうだね」と賛同しているのに対し、「まあ」のある（11）は何らかの問題に気づいた上で、その問題に目をつむって賛同している、という印象を与える。「そうだね」という命題が無条件に成立しないことを「まあ」が伝えるからである。あるいは、出来栄えを評価する「まあまあ（だ）」という熟語も、(4)の特殊化した形と考えることができる。

(12) **まあ**、合格だ。
(13) **まあ**、及第だ。

（作例）

いずれも、無条件で「合格」「及第」とはならないことを示している。このような文の「まあ」より後ろを省略し、「まあ」を重ねて特殊化したものが「まあまあ(だ)」になったと考えられるのではないだろうか。

２．意味の特殊化を求める「まあ」

次のような「まあ」の特殊な用法も（4）の仮説から説明できる。（14）は冨樫（2002）に見られる例文である。

(14)（B が太郎のことをよく知っている場合）
A　太郎って、今何してるの？
B ??あいつは、**まあ**、大学生やってるよ。

（冨樫 2002：19）

冨樫(2002)では、B が太郎のことをよく知っている場合、「まあ」が付いた B の文は不自然になると判断している。（太郎のことをよく知っていれば、「まあ」のない「あいつは、大学生やっているよ。」が正しいとする。）だが、太郎のことをよく知っている場合でも、「まあ」が文法的な文を作る場合がある。次のような状況を想像して欲しい。太郎は大学に籍を置いているものの、授業には全く出席せずバイトに明け暮れている。B は太郎のこのような状態をよく知っているが、これを直接には言いにくい。その時の B の答えであれば(15)は自然な文になるだろう。

(15) あいつは、**まあ**、大学生やってるよ。

（(14) より一部改変）

（15）ではこの発言には、大学生とは言い難い様子を

直接には語らず、ほのめかす意図が感じられる。この時「まあ」を付けずにこの意図を伝えるのは難しい。

(16) あいつは、大学生やってるよ。

（(15) より一部改変）

(15) の「大学生」は、大学生らしくない大学生といった意味と解釈できる。「あいつは大学生やってるよ」の命題を成立させるための条件として、「大学生」の意味がずらされたと考えることができる。命題を成立させるための条件として、わだかまり、成立確率、誤差の許容の他に意味のずらしという形のあることが分かる。次の文は、夢を追いかける癖のある社長を評した言葉と考えて欲しい。

(17) 社長は**まあ**、大きな子供なんだ。

（作例）

ここでの「大きな子供」はメタファーである。「まあ」がなくても文脈からメタファーであることは推測できるが、「まあ」のある方がメタファーであることが伝わりやすい。ここでも文字通りの意味ではないことを「まあ」が示している。次はメタファーではない例である。

(18) 昨日も今日も、会社は、**まあ**愉快愉快。

（作例）

これは大変な状況にある会社の様子をアイロニーで表現した文であり、「愉快愉快」の意味が逆転している。（正確には、アイロニーの下位分類の一つ、正反対の意味で言葉を使う語意反用という修辞技法になる。）アイロニーであることは「まあ」がなくても伝えられるが、「まあ」があった方が伝わりやすいだろう。

３．感動詞用法

「まあ」の感動詞用法も制限条件で説明することができる。感動詞用法とは次のようなものである。

(19) **まあ**、すごい。
(20) **まあ**、綺麗。
(21) **まあ**、寒い。

（作例）

感動詞用法は使用者に制限があり年長の上品な女性が典型的な使用者となる。さらに、感動詞用法では使用者だけでなく対象にも制限があるが、対象についての制限はこれまで指摘されてないと思われる。

(19) **まあ**、すごい。

これによって賞賛できる人物は幼児か子供にほぼ限定される。もし成人に対して（19）を使ってしまうと、相手を子ども扱いしたような印象を与えてしまう。一方、賞賛の対象が幼児であれば、トイレに一人で行けたといった大人には当たり前のことでも、これを使って褒めることができる。

(20) **まあ**、綺麗。

この文が人に対して使われる場合、賞賛する対象は(19)より広くなるもののやはり制限がある。（20）を成人に対して使うことは可能だが、賞賛する対象は親戚や友人などの身近な人で、さらに年齢が話者と同じか年下に限定されるだろう。一方、（20）は人物以外を対象にすることも可能であるが、そこにもやはり制限がある。大自然の圧倒されるような風景を前にした時、その風景がどんなに綺麗であっても(20)は言えない。その感動を伝える言葉は、「まあ」を付けない「綺麗。」となるだろう。あるいは、巨大なダイヤモンドを見てその怪しい輝きに魅入られている時に「まあ」を付けた（20）は言えない。もしも、（20）と言える人がいるとすれば、それはそのダイヤを見てもさして驚かない人、そのような宝石に見慣れている人となるだろう。類例をあげてみる。

(21) **まあ**、寒い。

体の芯まで凍りそうな寒さの中で（21）を発する余裕はない。「まあ、寒い。」と言えるのは、例えば、予想以上に気温が低いというような、多少の余裕を持って寒さを受け止められる場合ではないだろうか。

(22) **まあ**、おいしい。

（作例）

未体験の感動するほどのおいしさを体験した時に(22)が出てくるだろうか。（22）を言えるのは自分の体験や想定に収まるおいしさを感じた時である。

ここまでの検討をまとめてみよう。感動詞用法の「まあ」は驚きや感動を伝えているように見えるが、実際に伝えるのは感動や驚きが一定の範囲内に収まってい

ることであり、無制限の驚きや感動には使えない。感動詞的用法も「まあ」の制限条件が顕在化したものとして説明できる。

最後に感動詞用法の使用者制限について考えてみたい。自分の驚きや感動をあえて想定範囲内のものとして表現する行為は、自分を抑えて表現するという点で上品さを感じさせるが、どうしても芝居がかったものになる。このような発言が似合う人間は自ずと制限され、それがそのまま感動詞用法の使用者制限になるのではないだろうか。芝居がかった上品なふるまいが似合うのは年長の上品な女性である。

４．謙譲表現と「まあ」の衝突

「まあ」について、ここまで命題の制限条件という観点から考えてきた。この仮説は「まあ」のいろいろな用法を統一的に説明できるが、「まあ」にはこの仮説だけではまだ説明できない部分が残っている。後述するように「まあ」はいろいろな形で優位性とかかわっているが、これを命題の制限条件から説明することは難しく、優位性という新たな説明原理を立てる必要があると思われる。そして、「まあ」にとってより重要なのは、おそらく優位性の方である。「まあ」の優位性は様々な形で出現する。それを象徴的に表すものとして謙譲表現・謝罪表現との衝突をあげてみたい。

（23）から（26）は「まあ」を謙譲語と共起させた例であるが、いずれも相手を見下したような強いマイナスの印象を作ってしまう。

(23) ×**まあ**、今すぐ参ります。
(24) ×**まあ**、お話うかがいしました。
(25) ×**まあ**、承りました。
(26) ×**まあ**、発言させていただきます。

（作例）

「まあ」は謝罪表現とも共起しない。

(27) ×**まあ**、申し訳ありません。
(28) ×**まあ**、善処いたします。

（作例）

謝罪表現に「まあ」を付けると謝罪の気持ちの伝わらない、意図の分からない発言になってしまう。謙譲も謝罪も自分が下であることを伝える表現であり、「まあ」はこれらと強く衝突することから、話者の優位性を伝える意味（含意）のあることが想定される。

５．あいづちと感動詞用法

あいづちの「まあ」が評価を下げることも、優位性の一つと考えることができる。

(10) そうだね。
(11) **まあ**、そうだね。

（再掲）

（10）が相手の発言を素直に評価・賛同しているのに対して、（11）では発言に対する評価が下がっている。（11）では感動詞用法と同様の効果が発生して、相手の発言が想定の範囲内だった、すなわち自分にはそれが分かっていたという印象を作るためと考えられる。あいづちの「まあ」が社会的に上位の人に対して使いにくいのは、自分の見方や知識が相手に優越するという印象を作るためだと思われる。上位者の発言に対するあいづちとして（29）は問題ないが、（30）は無礼な印象を与えるだろう。

(29) その通りですね。
(30) **まあ**、その通りですね。

（作例）

「まあ」のある（30）は、相手を下に見ている印象を作る。これと似た効果は感動詞用法においても見られた。

(20) **まあ**、綺麗。

（再掲）

これらを人物の賞賛に使った場合、相手を子供扱いしているような印象を与える危険があり、賞賛の対象は自分と同等か下位の人間に限られることを述べた。

６．文脈上の優位性

ここまでは「まあ」の優位性が文意に影響する事例をあげてきたが、優位性が文脈上の出現条件として観察される場合がある。

(31) **まあ**、冗談だけど。

（作例）

これまでの話が冗談だったことを伝えるメタ・レベルの言葉であり、この発言では「まあ」を付けることが自

然だと思われる。ただし、相手が冗談であることに気づいた場合には「まあ」は付けられなくなる。冗談だと気づいた相手に明かす場合、その言葉は「まあ」以外の例えば次のような形になるだろう。

(32) そう、冗談さ。
(33) うん、冗談だよ。

（作例）

聞き手が冗談であることに気づいていないことが、メタ言語の「まあ」の出現条件になっている。相手が冗談であることに気づいて優位性が失われてしまうと、「まあ」が立てなくなる。曖昧性の「まあ」にも同様の出現条件がある。

(5) 1980 円に消費税だから、**まあ**、2100 円くらいかな。

（再掲）

ここで「まあ」が使えるのは最初に予想を言う者だけである。複数の人が金額を予想した場合、後から発言する者は「まあ」を使えなくなる。(34)では A に反論する形で B が異なる予想を提示している。

(34) A　1980 円に消費税だから、**まあ**、2100 円くらいかな。
B ??**まあ**、2200 円くらいだよ。

((5)より一部改変)

A が先に予想を出したことで、B の「まあ」使用が不自然になる。B の発言が曖昧性を含んでいるにもかからず「まあ」が立てないことから、「まあ」の選択においては曖昧性よりも優位性が優先することが分かる。さらに、B が自信をもって相手の予想を修正していることから、優位性が自信によって作られるものでないことも分かる。

文脈による「まあ」の制限は、曖昧性以外の「まあ」においても見ることができる。（35）において B は A に反論している。

(35) A　**まあ**、出世を考えるなら、そんなことは言わないことだ。
B??**まあ**、出世したいからこそ、あえて言うんだ。

（作例）

（35）は曖昧性を含まないが、B の反論に「まあ」が立てないことは（34）と同様である。しかし、（35）の会話が次のように展開すれば「まあ」の使用が可能になる。

(36) A　**まあ**、出世を考えるなら、そんなことは言わないことだ。
B　**まあ**、出世が全てのお前には分からんよ。

（（35）より一部改変）

ここでの違いは何だろう。（36）が（35）と違うのは、（36）が相手の発言を相対化するメタ・レベルに立った発言という点にある。同じレベルでの発言・反論には使えない「まあ」が、メタ・レベルからのコメントなら使える。この事実は「まあ」の優位性を考える上で重要であると思う。さらに類例をあげる。次はなだめ「まあ」である。

(38) **まあ**、そんなに興奮しないで。
(39) **まあ**、もう少し考えてみようか。

（作例）

いずれも興奮している相手を落ち着かせる、なだめに「まあ」が使われている。（38）（39）のように「まあ」の後に文が続くことがあるが、「まあまあ」だけでも、なだめる発言を作ることができる。なだめのポイントはメタ・レベルの視点にある。興奮して状況が見えなくなっていることを教え、意識を変えさせようとするのがなだめだからである。

ここまで、「まあ」の優位性を示す例として、謙譲表現などと衝突すること、あいづちや感動詞用法では相手に優越する印象を作ること、文脈上での優位性が出現条件となることをあげた。ただし、優位性とつながる用法はこれ以外に見いだせる。

7．強引な表現を作る「まあ」

「まあ」には、強引さや図々しさを感じさせる使い方がある。

(40) そこのところをどうかよろしく。
(41) **まあ**、そこのところをどうかよろしく。

（作例）

「まあ」のない（40）は話者の弱い立場を感じさせるが、「まあ」が付くと強引さや図々しさを感じさせるセリフに変わる。「まあ」によって、相手はこの依頼を受

けるはずだ（受けざるを得ない）という自信を感じさせ、それが強引さや図々しさの印象につながると考えられる。さらに次を見ていただきたい。

(42) **まあ**、お互い大人ですから。

（作例）

（42）が映画の中のセリフだとしたらどんな場面がふさわしいだろう。相手に強引に譲歩を求める脅迫めいた場面、そんなところが思い浮かぶのではないか。（励ましたり、共感したりする場面なら「まあ」は付かないだろう。）（42）に脅迫めいた意味が生まれるのは、相手の弱みを握っていることを「まあ」が言外に伝えるからだと思われる。「まあ」の優位性は文脈に応じていろいろな意味で顕在化し、これらの文脈では相手の弱みを握っているという含みとして顕在化したと思われる。下の例では「まあ」をつけることで、話者が自らの優位性を強調している。

(43) **まあ**、そこまでだろうね。
(44) **まあ**、そう言うだろうと思ったよ。
(45) **まあ**、あなたには分からないよ。

（作例）

（43）と（44）では相手の言動を予想していたという含みになり、（45）では自分と相手の隔たりを強調する含みが感じられる。これまでの用例から、「まあ」の優位性はいろいろな意味（含み）として顕在化することが分かる。

８．話者の社会的優位性と「まあ」

「まあ」の使用者が社会的優位性に制限されることがある。

(46) **まあ**、そろそろ終わりにしようか。

（作例）

仕事の終了を伝える言葉であり、この文を発するのは終了を宣言できるリーダーに限られる。それ以外のメンバーは終了を宣言することはできず、終了については次のような提案あるいは疑問文となり「まあ」が不自然になる。

(47) ?? **まあ**、そろそろ終わりですよね。

（（46）より一部改変）

次の文は会社の朝礼での発言だと思っていただきたい。担当者が今日の仕事について説明した後で、リーダーがそれをまとめる言葉である。

(48) **まあ**、そういう事ですので、ミスのないようにお願いいたします。

（作例）

この場面で、朝礼の司会者（非管理職）がこれと同様の発言をすることはできるが、その場合「まあ」を外した発言になるだろう。

あるいは、依頼者と被依頼者との発言では、「まあ」の使用は依頼者だけに限定される。依頼者の立場が上だからである。次の例文は会社での商談の会話だと考えていただきたい。A が仕事を受ける側、B が依頼する側である。

(49) A1　作業はこのような流れになりますが、よろしいでしょうか。
B1　これだけ考えていただければ、私どもも安心できます。
A2　有難うございます。
B2　これからもよろしくお願いします。

（作例）

依頼側の発言である B1、B2 には「まあ」を立てることが可能だが、仕事を受ける側の A1、A2 に「まあ」を立てることはできない。

９．社会的下位の者が発する「まあ」

ここまで優位性を感じさせる「まあ」の例をあげてきたが、社会的に下位の者が上位の者に対して使える（無礼な印象を与えない）「まあ」がある。次の(50)から(52)はいずれも、A が上位、B が下位の関係にある人物の会話である。

(50) A　これからどうするつもりだ？
B　**まあ**、一生懸命がんばってみるつもりです。

（作例）

(51) A　昨日、ここに女の子が来なったか？
B　**まあ**、ちょっとわかりません。

（作例）

(52) A　亡くなったおばあちゃん、どんな人だったの？

B　**まあ**、そうですねぇ。昔のことなんであんまり覚えてませんが、**まあ**粋な感じの人でしたね。

（作例）

これらの「まあ」に共通するのは、自分について話していることである。「まあ」が様々な形で優位性とかかわることを見てきたが、自分について語る時には優位性が発現しない。

10. 「まあ」に対する仮説

ここまでの検討結果を確認してみたい。「まあ」には制限条件と優位性という二つの意味（含み）が想定できた。そして、曖昧性やメタ言語の用例から、制限条件に優位性が優先する可能性の高いことが確認できた。ここから優位性が「まあ」の中心的意味をなしているように思えるが、自分自身を語る時には優位性が発現しない。「まあ」の意味はこのように多様で複雑であるが、やはり優位性が「まあ」の核にあると思われるので、「まあ」の意味を次のようにまとめてみたい。

(53) 「まあ」は話者が優位性を感じた時に現れる。

自分自身を語る時の「まあ」から考えてみよう。これは優位性を感じさせない用法であったが、ここには優位性を認めることができる。自分以上に自分を知る者はいないから自分の語りが脅かされることはなく、この意味で自分自身の語りには常に優位性がある。そのため自分を語る時には「まあ」が出現しやすい。では、制限条件はどのように説明されるのか。制限条件の用例として、曖昧性、わだかまり、意味のずらし、あいづち、感動詞用法などをあげることができた。これらはいずれも、自分が優位であると感じた時に現れる用法だと考えられる。曖昧性が、文脈の優位性を出現条件とすることは既に述べた。一方、曖昧性以外のわだかまり、あいづち、感動詞用法などは、相手を批評する、相手に教えるといった場面に登場しやすい用法ではないだろうか。いずれも優位性のある場面である。

(1) 日本でリンゴと言ったら、**まあ**青森ですよ。

（わだかまり）

(11) **まあ**、そうだね。

（あいづち）

(17) **まあ**、社長は大きな子供なんだ。

（意味のずらし）

(20) **まあ**、綺麗。

（感動詞用法）

話者の感じる優位性は固定的なものではなく、会話の中で強弱が常に変化している。そして、会話の中で明確な優位性を感じたことを条件に「まあ」が出現するというのが本稿の予想である。ただし、優位性という言葉が曖昧であるため、これを仮説とするには優位性をより客観的なものに規定し直す必要がある。また、この予想の妥当性は、自然会話から検証されなくてはならない。さらに、優位性と制限条件の関係も明らかにする必要があるだろう。自然会話の観察を通して、本稿の予想の妥当性を見極め、より客観性の高い仮説としていくことが今後の課題である。

引用文献

大工原勇人（2010）「日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究:フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて」,神戸大学博士学位論文

冨樫純一（2002）「談話標識「まあ」について」,『筑波日本語研究』7,pp.15-31.